岐大のいぶき

特集1

主体的な自然体験『森のようちえん』で新しい保育の在り方を研究

上／大人はできるだけ口を出さず、子どもが自分で気づくまで見守ります。「教えると感動がないですから」と今村准教授。中／小川で子どもと遊ぶ学生。「森には会話と遊びのきっかけがたくさんあります」と話します。下／学生たちも一緒に子どもたち熱演の“お笑い”を楽しみます。

深い遊びの体験ができる森は最高の保育現場です。

岐阜大学教育学部
家政教育講座 保育学研究室
今村 光章（みつゆき） 准教授

『森のようちえん』とは

スウェーデンやデンマーク、ドイツで生まれた保育活動で、年間を通して定期的に同じ森へ出かけ、子どもの自主性に任せて自由な遊びを楽しむ活動です。

活動を続けると、子どもたちは四季折々の自然の変化やリズムを知ることができます。また、五感を働かせて自然の動きを感じ取り、友だちや動植物、光、風と一体になって遊ぶうちに、誰かと共に生きる力を身に付けていきます。

運営形式は3タイプ。保護者を含む自主的なグループが通年で運営する「通年型」。幼稚園や認可型保育所で園外活動の一部として取り入れる「融合型」。そして、自然学校や任意団体が行事で実践する「行事型」。私は「行事型」の『ぎふ☆森のようちえん』を主催し、毎月1回、子どもを森に集めて活動しています。

私は、幼少期にはある程度の自然体験が必要だと思います。

元々、環境教育によって環境問題を解決し、持続可能な社会を作ろうという、青くさい研究と幼児教育学研究を始めましたが、例えば、「酸性雨や温暖化でこんな影響が出ますよ」と学校で教えるだけでは、子どもたちの行動は変わりません。しかし、実際に森へ何回も行くうちに、その場所が自分にとって大事なものだということがわかってきて、守ろうという気になります。私自身、幼少期を奈良県吉野町の山奥で過ごし、大学、大学院時代には障がい児の子どもをキャンプやスキーに連れていくボランティアをしていました。この経験が、現在の『森のようちえん』活動につながっているのだと実感しています。

森は教育現場でもあり、教育者養成の場でもある。

『森のようちえん』の最大の特徴は、〝子どもたちがやりたいと思ったことをやらせる〟ことと。無我夢中で遊んでいると、遊びに集中するあまり周りの状況が見えなくなります。このとき、子どもは〝あちら側の世界〟へ行っている。そして、我に返って〝こちら側の世界〟に帰ってきます。こうした、世界と一つになる〝溶解体験〟は、遊びこむなかで実感できるのです。溶解体験が持つ意味は、ふと我に返って、他者や世界とつながっているんだ、という意識感覚を持つことにあります。ひとりで生きる力を身につけるだけでなく、共に生きる力の基盤の感覚を持つようになるのです。また、園庭や教室のような制限がなく、遊びの可能性が開かれた自然環境は、子どもの自主性を育み、多様性への気づきをもたらします。そこでは教育者の意図や計画は通じず、偶然が頻繁に起こります。人間は自然をコントロールできないこと、大人が子どもをコントロールしたくてもどうにもならないことがあること、あちら側の世界があることを、気づかせてくれます。こうした意味で森は最高の教育現場であり、最高の教育者養成の現場なのです。

森で“遊びこむ”子どもたち

①五感をフル活動させ、感受性が豊かになる

雨、風、動植物などの自然の営みを目で見て触って、音を聞き、匂いを嗅いで全身で感じとる

②本当の危険を見極める力がつく

小さなケガや失敗を体験することで、本当の危険を察知する力がつく

③自発的創造性を発揮する

森で圧倒的な多様性を持つ事物に出会い、自発的に創造力と想像力を駆使して遊ぶ

④相手を思いやる心が芽生える

遊びの時空が充実しているため、仲間集団とのコミュニケーション力や社会性、協調性が向上する

⑤自己肯定感につながる

「あなたはあなたのままでいい」という親の意識が伝わり、親子の信頼関係も強まる

教員に向いているかどうか、学生の進路選択の一環として。

『森のようちえん』は幼稚園児だけで始めましたが、卒園後も来たいという子どものために、小学生クラスを始めました。

小学校の教員を目指す学生は、教育実習で小学生と触れ合う機会はありますが、子どもを野外で遊ばせる時間はないので、いい経験になっています。また、幼稚園の教員を目指す学生は全員、「幼児教育課程論」の授業の一環として『森のようちえん』に連れて行きます。中にはその後もボランティアとして参加する学生もいます。ボランティアを続けるうちに、幼児に対する見当がついてきます。例えば、年少だったら体の大きさはこのくらい、年中だったらこの程度のことがわかる、などです。また、自分が幼児教育に向いているかどうかも自覚できます。教育実習から帰ってきた学生が、本当に小学校、中学校の教員になるかならないかを決めるように、何回か足を運ぶうちに将来のことが現実的に見えてきます。意欲的な学生には、絵本の読み聞かせや、慣れてきたら指導者として子どもたちを引っ張っていく役を任せるなど、さまざまな機会も提供していきます。

私は自然とのつき合い方を、自然の中で学んでいけることを願っています。『森のようちえん』を通して、幼児期の自然体験が増えるような働きかけができればと思っています。

ぎふ☆森のようちえん 1日の流れ

9:00 スタッフによる現地の下見

9:45 森の朝の会

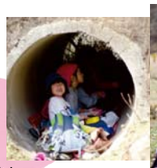
先生や友だちの名前を覚えます。「キャンプ場」「やくもく広場」「山」コースから、行きたいコースを自由に選ばせ、子どもの意欲を引き出します。

10:00 森へ出発。自然遊び開始

ヒミツの基地づくりはおもしろいよ〜!

12:00 昼食

食べたい場所で、友だちと「いただきます!」



13:00 午後の自然遊び

3コースが合流し、恒例の「お笑い」タイムです。

“はやいち”です〜、モノボケやります〜。

14:30 森の帰りの会

今日の振り返りと、今後、遊びたいことなどを自由に発言。学生が絵本の読み聞かせデビューをすることも。

15:00 解散。スタッフは後片付けと反省会

その日の保育の在り方や問題点などを話し合います。学生にとっては気づきの場となります。

子どもたちを支える仕事に就きたい

教育学部 家政教育講座４年
福田 いつか さん

『森のようちえん』には以前から興味を持っていたので、今村先生のゼミに決定して行けることになり、うれしく思いました。私は子どもの頃、アメリカに住んでいたのですが、危ないからと言われ、外に出してもらえませんでした。ですから幼少期の自然体験があまりなくて、今、子どもたちと遊びながら、花の蜜を吸ったり、木登りなどを経験しています。子どもたちと一緒にいると、与えられたもので育っていくのではなく、五感をフルに活用させて、自分から掴みとっていく芯みたいなものを感じます。自分に子どもができたときは、『森のようちえん』に入れて自然体験をさせたいですね。私は人見知りなので、今は教師になることは考えていませんが、教具を作るなど、子どもたちを支える仕事に就きたいという思いはあります。

ぎふ☆森のようちえん に
ボランティア参加する学生たち

遊びながら子どもとの関わり方が学べます

教育学部 美術教育講座３年
安藤 彰太 さん

ボランティアを始めたのは１年生の４月からです。私の志望は中学校教員ですが、教育学部は幼稚園の教諭の免許も取れるという話を聞いて、一緒に取っておこうと思いました。そして、今村先生の保育学の授業で『森のようちえん』のことを知り、自分がどれだけ子どもたちと対峙できるかを試してみたいという気持ちで行きました。初回は子どもの動きがつかめず、けっこう大変でしたが、今は担当する子どもたちの名前を必ず覚えるようにしています。名前を覚えていると、子どもたちが自分を見てくれていると感じて安心すると思うので。大学では授業の教え方などは学びますが、子どもとの関わり方は学べません。先生と子どもとの信頼関係はとても大事だと思っているので、そういった関わり方を学べることが一番大きいですね。

『森のようちえん』の３形式に対する今村准教授の考察

行事型

専用の園舎やフィールドを特定せず、行事として幼児対象の環境教育活動を行います。

［特徴］
幼児教育の中で重要視される静と動のバランスがうまくとれますが、1カ月に1回程度のため、子ども同士や、先生と子どもとの人間関係の構築に時間がかかります。

［実施例］
ぎふ☆森のようちえん
（代表：今村光章准教授　園児：170名）

通年型

台風や雷雨などの荒天以外、ほぼ毎日、森の中で保育を行います。ドイツやデンマークでは一般的な形態です。

［特徴］
異年齢集団の中で過ごすため人間関係が濃くなります。たくましくなり、いやなことにもめげない忍耐力がつきます。常に森の中で活動するので、保育の内容に偏りが生じる可能性もあります。

［実施例］
森の妖精ようちえん
（園長：ハラルト・フォン・フラクシュタイン氏
アドバイザー：アレクサンドラ・フォン・フラクシュタイン准教授／今村光章准教授　園児：15名）

「子どもたちの“やってみたい”気持ちを大事にしたい」と、フラクシュタイン准教授。

融合型

幼稚園や認可型保育所において、園外活動の一部として活動します。年に10回から月に数回程度、森へ出かけます。

［特徴］
いつも一緒にいる先生や仲間と森へ出かけるので安心して楽しめますが、一方で、幼稚園での関係が出たり、先生の指導性が高くなることがあります。

［実施例］
ながら幼稚園
（アドバイザー：今村光章准教授　園児：230名）

※実施例はすべて『ながら川ふれあいの森』で活動しています